

きょうだい構成と対人関係についての研究

廣田 美穂

明治安田生命千代田支社
八重洲西営業所

磯川 かなえ

跡見学園女子大学大学院
人文科学研究科
臨床心理学専攻

山口 豊一

跡見学園女子大学

1. 問題・目的

近年、家族関係や親の養育態度などと子どもとの関係について注目が寄せられており、様々な研究もなされている。しかし、同じ「家族」という重要な枠組みでありながら、きょうだい関係についての研究は両親と子どもについての研究に比べて少ない。白佐（2006）も、我が国において、家族関係の研究では親子関係や夫婦関係と比較してきょうだいに関する研究が少ないことを指摘している。

きょうだいの存在は、個人の自己意識の形成や自己評価に影響を及ぼし、対人関係の基盤をなすものと考えられる。さらに言えば、人生の各段階において、重要な意思決定を行い、その将来を形成する上でも大きな役割を果たすと言える。年齢段階によって、きょうだい関係やきょうだい意識はどのように変化するか、また、それはどのような要因によって規定されるか、その心理機制を捉えることが必要となる。

きょうだいの出生順位と性格について、依田・深津（1963）は、二人きょうだい間で比較をし、自制的・ひかえめ・人前に出ることを嫌うという長子的性格、快活・甘ったれ・知ったかぶりのような次子的性格、面倒嫌い・恥ずかしがり・人前に出ることを嫌うという男子的性格及びおしゃべ

り・ひかえめ・親切のような女子的性格が存在すると明らかにした。また、きょうだい構成が性格形成に影響を及ぼす理由は、出生順位によって子どもへの養育者の関わり方と、出生順位に伴って生じるきょうだい間の相互作用のあり方が変化するからである（福島，2010）。

我々は日常生活の多くの時間を、他者と接しながら過ごしている。対人場面で、人は時に緊張したり不安になったりといった「対人不安」を感じる。松尾・新井（1998）は児童を対象に、公的自己意識が高く、しかも対人的自己効力感が低い者が最も強い対人不安傾向を示すのではないかという仮説について検討を試み、明確な支持的証拠を得ている。ここで対人的自己効力感とは、「対人的場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的な評価」（松尾・新井，1998）と定義されているが、公的自己意識が高く、対人的自己効力感が低い、つまり他者からの目が気になり、自分の社会的行動の遂行に自信の持てない子どもが、最も強い対人的不安傾向を示すという結果が得られた。

このように、対人不安は誰にでも起こりうるものであり、それを感じる強さに個人差はあるものの、我々が生活していく上で

切り離すことのできない感情であることから、その発生メカニズムについては様々な要因が関連していると思われる

そこで、本研究ではきょうだい構成（出生順位・男女）及び欲しかったきょうだいによって対人不安には差が存在するのか、また、対人不安と自己顕示性についても関係性があるのかを検討する。

なお、本研究では以下の仮説に基づいて検討を行う。

- 1) 自己顕示性が高いと対人不安は低くなる。
- 2) 兄・弟などの異性のきょうだいを欲しい人ほど状況別対人不安は低くなる。

2. 方法

調査対象者 本大学の学生、3年生から4年生の99名を対象に行なった。

調査時期 2012年6月

調査方法 調査は、質問紙を授業で配布し、無記名による任意の回収とした。用いた質問紙の内容は以下の通りである。

1) フェイスシート

学年・学科・現在のきょうだい構成・欲しかったきょうだい（兄・姉・弟・妹）について、それぞれ尋ねた。

2) 新性格検査

柳井・柏木・国生（1987）《自己顕示性》を用いた。

項目は、計10問からなり、3件法（「はい」～「いいえ」）で、回答を求めた。各下位尺度ごとに合計を算出し、得点が高いほど自己顕示性が高いことを示している。

3) 状況別対人不安尺度

毛利・丹野（2001）によって開発された状況別対人不安を測定する尺度を用いた。状況別対人不安を「発表・発言不安」、「親しくはない相手不安」、「異性への不安」、「会話のない不安」、「目上への不安」の5領域から捉える。発表発言不安8問、親しくはない相手不安8問、異性への不安5問、会話のない不安5問、目上への不安4問、計30問からなり、4件法（「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」）で、回答を求めた。本研究では、発表発言不安の項目内で、対象者である大学生に当てはまらない質問を2問除外した計28項目を使用した。なお、下位尺度ごとに算出した合計得点を使用することはできるが、すべての得点の総合得点は使用できない。さらに、得点が高いほど状況別対人不安が高いことを示している。

分析方法 分析には、統計ソフトSPSS ver.18を使用し、対人不安及び自己顕示性の相関分析、欲しいきょうだい構成（兄、姉、弟、妹）と対人不安及び自己顕示性の平均値の差の検定（分散分析）を行う。

倫理的配慮 質問紙に、質問紙の趣旨に関する説明、卒業論文のみに回答を使用することを明記した。

3. 結果

1) 対人不安及び自己顕示性の相関係数

「発表発言不安」と「親しくはない相手不安」、「異性への不安」、「会話のない不安」、「目上への不安」との間には比較的強い正の相関が見られた（親しくはない相手不安 $r=.528$, $p<.01$, 異性への不安 $r=.419$, $p<.01$, 会話のない不安 r

表1 対人不安及び自己顕示性の相関

	発言不安	親しくはない 相手不安	異性への不安	会話のない不安	目上への不安	自己顕示性
発言不安	—	.53** (N=98)	.42** (N=98)	.44** (N=98)	.51** (N=97)	-.40** (N=94)
親しくはない相手不安		—	.53** (N=99)	.55** (N=99)	.61** (N=98)	-.18 (N=95)
異性への不安			—	.51** (N=99)	.64** (N=98)	-.12 (N=95)
会話のない不安				—	.62** (N=98)	.04 (N=95)
目上への不安					—	-.07 (N=94)
自己顕示性						—

** $p < .01$

$r = .444$, $p < .01$, 目上への不安 $r = .514$, $p < .01$ 。「発表発言不安」と「自己顕示性」との間に比較的強い負の相関が見られた ($r = -.403$, $p < .01$)。「親しくはない相手不安」と「異性への不安」,「会話のない不安」,「目上への不安」との間には比較的強い正の相関が見られた (異性への不安 $r = .532$, $p < .01$, 会話のない不安 $r = .552$, $p < .01$, 目上への不安 $r = .612$, $p < .01$)。「異性への不安」と「会話のない不安」,「目上への不安」との間には比較的強い正の相関が見られた (会話のない不安 $r = .505$, $p < .01$, 目上への不安 $r = .644$, $p < .01$)。「会話のない不安」と「目上への不安」との間には比較的強い正の相関が見られた ($r = .624$, $p < .01$) (表1)。

2) 欲しいきょうだい構成と対人不安及び自己顕示性の分散分析

① 出生順による検討

出生順位 (第一子, 中間子, 末っ子, 一人っ子) によって対人不安 (5つの不安因子) および自己顕示性に差が見られるか検討した (一元配置の分散分析)。

その結果, 出生順位による対人不安下位尺度および自己顕示性の平均値の差は見られなかった。

② きょうだい構成の男女差による検討

きょうだい構成の男女差によって対人不安 (5つの不安因子) および自己顕示性に差が見られるか検討した (一元配置の分散分析)。

その結果, きょうだい構成の男女差による対人不安下位尺度および自己顕示性の平均値の差は見られなかった。

③ 欲しいきょうだいによる検討

欲しいきょうだい構成 (兄, 姉, 弟, 妹) の差によって対人不安 (5つの不安因子) および自己顕示性に差が見られるか検討した (一元配置の分散分析)。ただし, 今回は複数回答, 無回答の人を除く76人で検討した。

その結果, 「異性への不安」 ($F(3, 72) = 4.11$, $p < .01$), 「会話のない不安」 ($F(3, 72) = 5.04$, $p < .01$), 「目上への不安」 ($F(3, 72) = 3.81$, $p < .05$) であった。「発表発言不安」については10%水準で有意傾向が見られた。「異性への不安」「会話のない不安」については, 1%水準で有意差がみられた。また, 「目上への不安」については, 5%水準で有意差がみられた。

Turkey法による多重比較の結果, 「異性への不安」では, 兄あるいは姉を欲しいと言っている人に比べて, 弟を欲しいと言っている人の方が, 不安が高かった。「会話

表2 欲しいきょうだい、対人不安及び自己顕示性との差の検討

分散分析の結果						
		<i>N</i>	平均値	<i>SD</i>	<i>F</i> 値 (<i>df</i>)	多重比較
発言不安	兄	41	15.9	4.317	2.504	<i>n.s.</i>
	姉	28	17.44	5.272		
	弟	4	22.25	2.363		
	妹	3	16	6.083		
親しくはない相手不安	兄	41	17.66	4.345	2.038	<i>n.s.</i>
	姉	28	19.39	6.232		
	弟	4	23.75	4.193		
	妹	3	18.33	3.786		
異性への不安	兄	41	11.63	3.839	4.105**	兄<弟
	姉	28	13.18	3.897		
	弟	4	18.25	2.363		
	妹	3	14	4.583		
会話のない不安	兄	41	11.07	3.134	5.04**	兄<弟
	姉	28	11.75	3.777		
	弟	4	18	1.414		
	妹	3	11	5.292		
目上への不安	兄	41	8.85	2.424	3.809*	兄<弟
	姉	28	9.71	3.365		
	弟	4	13.5	1.732		
	妹	3	7.67	3.512		
自己顕示性	兄	41	19.54	5.109	1.441	<i>n.s.</i>
	姉	28	18.3	5.232		
	弟	4	16.75	3.5		
	妹	3	23.67	2.082		

** $p<.01$, * $p<.05$

のない不安」,「目上への不安」では,兄あるいは姉を欲しいと言っている人に比べて,弟を欲しいと言っている人の方が不安が高く,また,妹を欲しいと言っている人に比べて,弟を欲しいと言っている人の方が不安が高かった(表2)。

4. 考察

1) 相関係数

「発表発言不安」は,すべての因子に比較的強い相関が見られた。また,5つの対人不安(発表発言不安,親しくはない相手不安,異性への不安,会話のない不安,目

上への不安)は強いほど自己顕示性はマイナスに強くなっていた。これは,不安が強いため,自己顕示性もよりマイナスに強くなってしまうのだろう。また,「欲しいきょうだい」と「異性への不安」に弱い相関が見られた。不安の強さによって欲しいきょうだいが変わるのだろう。

2) 欲しいきょうだい構成と対人不安及び自己顕示性の関係

きょうだい構成の出生順位や男女差について,僅かに差が出たものの,対人不安(5つの不安因子)および「自己顕示性」に有意差は見られなかった。

欲しいきょうだいでは、「異性への不安」「会話のない不安」「目上への不安」については、5%水準で有意差が見られた。

「異性への不安」では、兄・姉と弟の間に差が見られた。「会話のない不安」と「目上への不安」では、兄・姉・妹と弟との間に、それぞれ有意差が見られた。全体を通して、「弟が欲しい」と答えた人がより不安が高いことが分かった。このことにより、仮説2の一部が実証された。

不安が高い人は、その不安を解消するために、自分が優位に立てる年下を欲しがるのだろう。同じ年下の妹ではなく弟が欲しいと答えた人が、より不安が高かった。これは、無意識的に女性より男性の方が上だと考えてしまっているからではないだろうか。

5. 今後の課題

全体的に、対人不安が高い人は弟を欲しがるという結果が得られたが、きょうだい構成自体では、大きな有意差は見られなかった。今回は、女子大学の在学生を対象に調査を行ったため、同年代の女性の結果しか得られておらず、有意差が見られなかったと考えられる。そのため、男性に調査を行った場合、異なる結果が得られると推測される。また、欲しかったきょうだいの数にばらつきがあり、等質なデータとは言えないため、今後のデータの取り方を検討する必要がある。

また、自己顕示性が高い人ほど状況別対

人不安が低くなるという仮説は実証されなかったが、これは分析に十分なデータ数が得られなかった可能性も考えられるため、十分なデータ数を集めて再度検討する必要がある。

引用文献

- 福島 治 (2010). 「家庭の人間関係」 相川 充・高井次郎 (編著) 『コミュニケーションと対人関係』 pp.212-230 誠信書房
- 依田明・深津千賀子 (1963). 出生順位と性格 日本心理学会第11集(4) 239-246.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1988). 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究 46(1), 21-30.
- 毛利伊吹・丹野義彦 (2001). 「状況別対人不安尺度」 堀洋道監修 松井豊・宮本聡介編者 (2011) 『心理測定尺度集 VI』 pp.243-249 サイエンス社.
- 白佐俊憲 (2006). きょうだい研究の動向と課題 日本児童研究所 (編) 『児童心理学の進歩2006年版』 pp.57-84. 金子書房
- 柳井 晴夫・柏木 繁男・国生理 枝子 (1987). 「新性格検査」 堀洋道監修 山本真理子編者 (2011) 『心理測定尺度集 I』 pp.114-122 サイエンス社.